

## 博士学位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名	松林 和佳子
論文題目	E. M. Forster の作品における「ファンタジー」の諸相
論文審査担当者	主 査 松宮 園子 ㊞
	審査委員 金澤 哲 ㊞
	審査委員 鴨川 啓信 ㊞

松林和佳子の学位論文は、20世紀を代表する英国人作家 E. M. Forster の短編及び長編小説を「ファンタジー」という概念を軸に捉え直し、従来的には初期のやや未熟な短編小説における特徴と評価されてきたファンタジー的要素が、リアリズムあるいはポスト・コロニアリズムの批評的文脈での研究が中心である後期の代表作に至るまで脈々と受け継がれており、Forster の小説世界を貫く鍵となっていることを論証したものである。超自然の空想的なテーマを扱うジャンルと理解されがちな「ファンタジー」という概念を、Forster が小説論 *Aspects of the Novel* (1927) において述べた「通常とは異なる読みを要求する、ひとすじの光」という表現を出発点に発展させ、各作品の解釈への適用を試みた独自性は高く評価できる。

論文は序章に続く 6 つの章、及び結論で構成されている。第 1 章では Forster の最初の短編小説 “The Story of a Panic” (1904) を取り上げ、執筆当時のゴシック小説や神話物語の再流行という潮流も踏まえながら、「人知を超える何ものかとの出会い」がキャラクターに及ぼす影響を精査しているが、単純な自然礼賛あるいは文明否定論に陥ることなく、テキストにおける牧神パンの出現というファンタジー的要素が、むしろ現実世界の多層性を浮き彫りにしている効果が明示されている。

第 2 章では “The Road from Colonus” (1904) と “The Eternal Moment” (1904) という、従来的には「ファンタジー色が薄まった」という理由から評価されていた二つの短編小説の再検証を試み、キャラクターに新たな自己認識をもたらす、日常の中に潜む啓示的瞬間の意義を詳細に分析し、それらの瞬間を Forster によるファンタジー的要素の発展形と捉え、後の長編小説への足掛かりとなっていると結論している。“The Eternal Moment” のオープン・エンディングに関する解釈が提示されていないことが惜しまれるが、論文全体の核となる「現実世界の中に潜むファンタジー」という論点が明確に打ち出された章となっている。

第 3 章では、*Where Angels Fear to Tread* (1905) と *A Room with a View* (1908) という初期の長編小説 2 作を取り上げ、異国での一瞬の非日常的体験を通じて生の本質に触れたキャラクターたちが、現実認識を大きく揺るがせられながらも、その後の人生を展望していくプロセスについて議論している。これらの 2 作品も狭義の「ファンタジー」とは距離があるものの、Forster 作品とマジック・リアリズムの関連性に注目する最新の批評に効果的に言及しながら、キャラクターの「日常の歪み」を丹念に描くことで、Forster がジャンルを混淆させ「現実」の多層性を前景化させてい

くプロセスを説得力をもって提示している。

第4章では Forster の唯一の SF 作品として名高い、機械に支配された未来社会を描いた短編“*The Machine Stops*”(1909)におけるファンタジー的要素を炙り出し、他作品との関連も検証しながらこの異色作の意義を再検証している。自然との接触や身体的感覚を失った未来人の視点が採用されることで、我々の「現実」が彼らにとっては失われた理想郷として出現するという「反転」現象に着目した議論は興味深いものであるが、審査担当者が指摘したとおり、キャラクターにとっての架空の理想郷としての「ファンタジー」と、論文を通じて用いられている「ファンタジー」の概念の関係性が曖昧であるために、やや論点が混乱した印象を与えるものとなっている。

第5章では長編小説 *Howards End* (1910)を取り上げ、リアリズム批評の枠組みでは従来の欠陥と見なされてきたテキスト上の「乱れ」をファンタジー的要素として捉え直すことで、積極的に再評価することを試みている。因習に縛られた社会からの解放のきっかけを、本作では異世界や異文化との接触に頼ることなく、むしろ現実世界の中に我々の認識を超えた「歪み」「揺らぎ」を見出し、それを積極的に提示しようとする Forster の新たな試みが詳細に検証されている。

第6章では Forster の代表作と見なされている *A Passage to India* (1924)が描く、インドという異世界と英国人キャラクターの遭遇を、一般的なポスト・コロニアリズムあるいはジェンダー批評の観点ではなく、ファンタジー的要素という論文を貫くテーマから捉え直し、空や動植物が放つ「声」を、テキスト中の重要な諸場面で導入した Forster の革新性を鋭く検証している。インドの他者性、あるいは神秘という言葉でこれまで解釈されてきた、リアリズムの枠に収めることができないこれらの要素を、最初期の短編“*The Story of a Panic*”と結びつけ、ジャンルの混淆によって「現実」の多層性を追究し続けてきた Forster がファンタジー的要素を凝縮させた到達点として本作を位置づける本章は、論文の締めくくりにはふさわしい重厚な議論となっている。

このように本論文は、モダニズムという実験性、革新性が常に強調される時代の作家の中では一見保守的に見えながら、その小説技法、テーマ、ジャンルの全てにおいて実は分類が困難であり、近年、倫理批評やクイア批評の観点からも再評価が進む Forster の作品世界を、「ファンタジー」という従来の初期の短編のみに主に結びつけられてきた概念を拡大的に解釈することにより、説得力をもって新たな視座で捉え直している。Forster 及びモダニズムに関する先行研究のみならず、ファンタジー・ジャンルに関連する理論なども多数参照され、学位申請者のたゆまぬ研究努力が窺えるが、その分、「新たな読みを要求する」ファンタジー的要素と、「異化」「エピファニー」等の類似の概念が具体的にはどのように異なるのかという点が不明瞭であるという問題が審査担当者から指摘された。また語り等の技巧的側面が、ファンタジー的要素の存在から生ずる作品としての整合性の乱れをどのように補正しているのか、等の議論が欠けていることも、今後の大きな課題として指摘された。しかしながら、総じては綿密な批評文献の読解と詳細なテキスト・リーディングに裏付けられた、独創的かつ真摯な研究成果であると評価できる。

以上のことから、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに適格であると判断する。